

唐十郎

Juro Kara



ウレトサタニ

唐十郎

Toku Kura

河出書房新社

マウント・サタン

昭和五十九年八月二五日 初版印刷 ©一九八四
昭和五十九年八月三十日 初版発行

著 者 唐 十 郎

発行者 清水 勝

印刷 三松堂印刷
製本 大口製本

発行所 河出書房新社

〒104 東京都渋谷区千駄ヶ谷二丁目三十一番

電話 〇三―四〇〇四―二二〇一 営業

〇三―四〇〇四―八六一 編集

振替 東京〇一―〇八〇二

定価は帯・カバーに表示しています

ISBN4-309-00377-X

マ
ウ
ン
ト
・
サ
タ
ン

捨て猫の泣く雑木林の横を抜けると、離れて暮らす親の匂いがある。

その雑木林の中に、農家の物置小屋を改造した借家が三軒あって、その一つに彼の母が住んでいる。月々の仕送りも五万に満たないためか、養っているというよりも、追って来た親を辛うじて、五万以内の金でそこに釘付けにしているだけだ。

彼はまたどこかに引越すだろう。そうすると、親も更に尾いてくる気がする。

彼が親と共に暮らした上野の下町をひとり去ったのは十年も前のことだが、それから二年後、土地もそのあばら家の根っこ同然に思っていた親は、地主に家を壊され追い出し喰らい、摺り寄るように追って来た。

だが、ゴミ捨て場にもなっている雑木林の奥を覗き込むと、追って来たのは親のみならず、去った町の気配でもあるような気がする。物置きだった長細い平家は、三つに区切られ、小さな羽目板の垣根には、長屋で見た八つ手の葉が植えられ、それはちょうど、下町の八軒長屋の

三軒を切り取って移動させた格好なのだ。

昨日、彼がその一軒を訪ねると、針仕事をしていた親は、去った古い町の話を持ち出した。

「あの町にへたあさん」で女がいただろうか？」

「へたあさん」は、長屋の目と鼻の先に住む子持ちの女だったが、それを「へたあさん」と呼ぶ理由は分らないし、聞こうと思ったことはなかった。恐らく戦後の浅草映画館にかかったターザン映画と関わりのある愛称だろうが、それが女に付けられた理由など、面倒くさくて尋ねたくもなかった。老齢の身を忘れて「ターザン、たあさん」と繰り返すのを聞いていると、不気味な年齢が躍っているようにも思え、耳にうるさく感じたすと、小憎らしくもなってくる。

「へたあさん」がどうしたの？」

と話の腰を折ると、「どうしたのって、おまえ、この間、あの町でへたあさん」に会ったんだろう」と母は切り返した。

あの町に彼は確かに行ったが「へたあさん」には会わなかった。

彼が、その下谷万年町に舞い戻ったのは、昔の家の縁の下に埋めた日記を掘り出しに出掛けたわけだが、それは駐車場になったコンクリートで固まって、爪を掛けることさえ出来なかった。

「へたあざん」には会わなかったよ」

「でも、向うは会ったと言ってるんだよ」

駐車場になった空き地に四つん這いになっている姿も見たと云っている以上、へたあざんは確かに彼の背後に立ち、言葉もまた、掛けたのだろうが、秘密めいた物腰と血相を変えた姿に遠慮して立ち去ったに違いない。

「でも、ここには電話もないのに、どうしてそれを伝えて来たの？」

へたあざんは、雑木林のこの家を直接訪ねて、それを話したと彼の母は答えた。

懐かしさも加えて、ここに現われたのかと彼はうなずいたが、薄っ毛のほつれた髪をかきあげる親は、古い町が追いかけて来たために、まるで痛いものが目に刺さったかのように目をしばたたくのだ。

話を聞けば、やはり、昔の町で馴染みの息子に会ったことだけを伝えに来たようでもなく、女給あがりのその女は松葉杖を突きながら玄関に立ちほだかり、出した茶も飲まなかった。

彼の母親が差し出す座布団にも座らず、このままのほうが良いと、柱に寄りかかって、片方の松葉杖を休ませ、来る途中、靴に入った小石が痛いと言いた。彼の親がその足元にしゃがんで靴を脱がせて小石を払うと、「御親切に」と声をふるわせ、皺くちやの臉をぬぐった。

老婆のしゃくりあげは更に続いたが、辛いものはなにかと聞くと、裏目になった答えが頭ごなしに返ってくるようで彼の母親は、ささくれた松葉杖の根を見詰めているばかりであった。

古い町で声を掛け合っていた時には松葉杖などは使っていなかった女が、そうして痛々しい姿で現われると、忘れかけていた馬鹿な逸話が、思い出されてくるのだ。

彼が生まれる前にへたあさんゝは、御徒町のカフェの女給であった。

その小さな店は、今では名残りさえとどめないが、彼の母親の父が出していた店で、四、五人の女を雇い、上野広小路の片隅で賑わっていた。

浮かれ調子のある夜、娘の婿にと思った男と連れ立って祖父は自分の店に繰り出したわけだが、いくら盃をかさねても連れは硬直するばかりで、興に乗り過ぎた祖父は、店で一番バタ臭いと言われる女をギューギューと押しつけた。田舎から出て来て、いくら誇りの強い男は、硬い意地を張るのが男だと思い、そのまま口を開かずただ目をむいていたが、飲み過ぎた酒が変に回って、突然、身に叩っ込まれた武道を披露してしまった。

長椅子の片隅に座って、否が応でも抱けと押しつけられた女を、巴投げで、長椅子のはるか向うのテーブルに投げたのである。

女は救急車で病院に担ぎ込まれたが、二ヶ月以上も店に出ては来れなかった。

骨盤を骨折したという報せは、投げた男にも知らされたが、投げる前のあの無口な表情で「ウン」とうなずき、見舞いに病院に出掛けたが、照れるのか、病院前で頭を下げて帰ってくる始末であった。ただ、三日に一度は必ず病院の門のところに立ち、武骨な謝り方をしたので、誠意だけは買われ、女に訴えられることはなかった。

巴投げで飛ばされたこの女がへたあざんである。

そして、武骨な酒乱が、彼の父だった。

こうした馬鹿馬鹿しい逸話の後に、店の持ち主の娘と酒乱は結婚して彼が生まれたわけだが、苦々しい傷をこうむったへたあざんの存在を忘れることは出来ない。

彼の母が、なにが辛いと聞いた時の、裏目の返答とは、そんな古い傷の後遺症のことである。松葉杖を突いたへたあざんを見れば、やはり、カフェ時代の怨み言を聞く用意もしなければならぬと思うただろう。

そればかりか、松葉杖を突いたへたあざんを見たならば、責任のない彼さえも静々と頭を下げなければならぬような気がする。

古い町にいた頃、へたあざんが遊びに来たよと告げると、晩酌をしていた父は正座して酒を水に替えた。

玄関から入って来たへたあざんが、彼の父のことを「お兄さん」と呼び、「いいのよ、お兄さん、続けなさいよ。なんだったら、あたしがお酌をしましょうか」と畳の上を這い寄ると、ウワアと真っ赤な顔で笑って両手を差し出し、もう勸弁を、と叫んだ。

一家を構えてから、重い口もこうして開くようになったが、口真一文字の、都会者に馬鹿にされてたまるかといったしかめ面時代の失敗は、彼の父には思い出しても冷や汗ものだった。

へたあざんの姿を見ると、彼は、それを彼自身の失敗のように思った。

口の重さが取れても酒乱の名残りが長びいたせいかな、彼は、父の失敗をいつも不安氣に想像した。

ある夏、白い上下の背広を着て仕事に出掛けて行った父は、帰宅時間の夕刻、飲み過ぎた酒もたたってか、上野駅のホテルで誰かと喧嘩して、ホームと列車の間に片足突っ込んだ。白いズボンは鮮血に染まり、そのまま片足をひきずって家に帰ると、玄関のガラス戸を開けずに頭から飛び込んで、肩にガラスの破片を突き立てたまま、大の字で寝てしまった。医者に行こうと揺り起こす彼と母親を振り払い、突然、窓を開けて、喧嘩相手に吠えるように、町内中に向かって喚く父に為す術なく、彼の母親はへたあざんを連れて来た。

へたあざんは、彼の父親の上にのしかかり、自分が分るかとゆさぶったが、錯乱した目には

なにもかもが赤い糸で縫い合わされた影に見え、ただ、吠えまくるだけだった。

この時、へたあさんゝはやにわに、酒乱の肩に両手を掛けると、逆立ちした形になり、赤い毛糸の下着も丸見えで、酒乱の男の頭の向うへ落ちて見せた。

海老のようにちぢこませた両足は壁にぶつかり、一瞬なにかを見た男の胸の上へへたあさんゝの頭は落ちた。まだ唸り続ける男の前で、二度、三度、それをへたあさんゝは繰り返し、間もなく静かになった男の鼾声に、へたあさんゝと彼ら親子は顔を見合わせた。

——そのへたあさんゝがなにを泣くことがあるのだろうかと思つた。

「あの歳になると、そりゃ腰痛も応えるんだらうけど、どうやら悩みごとは娘のことのようだったよ」

「二人の娘？」

「どちらだかは突っ込んで聞かせなかったけど」

嘆きの核心には触れられなかったこんな話が、親の家から百メートル離れたアパートに帰つた後も、彼の頭の底に、妙に澱んだ。

酒乱の父を介抱したことのある女の姿に、人一倍、愛着を持ったためだろうか。松葉杖を突く程の腰痛に、今はいない父親の責任を背負わされたように思えるのかトンと分らないが、百

メートルの近隣に漂う古い町の気配と登場人物に、彼は重苦しくも甘美な引力を感じたのだ。

古い町は下谷万年町という名で呼ばれていた。戦前は東京三大貧民窟の一つと呼ばれ、戦後は、主に上野駅を稼ぎ場とする男娼の巢であった。旋風のように移り住んだ男娼が、また屁のように去ったのは昭和三十三年、朝鮮戦争のほとぼりが冷めた頃で、それから七年、彼は、その町で、原色と喧噪の余韻を耳にこびりつかせたまま住んでいた。

娘二人と暮らすへたあざんゝの家は、露地の角の歯医者で、トタン板などを張りつけない洒落たモルタルの一軒だった。一階は小さなバーであつたらしいが、それを取り壊し、自転車置き場に洗濯物を吊るすだけの贅沢な間取りで、階段を上った二階にへたあざんゝの一家は暮らしていた。

娘二人は、それぞれの父が違い、一つ違いであつたが、いつも肩を押しつけるように一緒に物静かでもあつた。大きな声で笑ったり叫び合うところなど見たこともなく、町内の祭があつても、山車の綱も引かずに、遠目から二人で見詰めている程おとなしく、皆から幽霊と呼ばれていた。

上の娘の名は滝枝で、下は房枝であつた。

二人揃って柳の枝の下を通る時などは、ほら、冷たい風が吹いてくると子供たちは噂した。

へたあざん」の娘達と彼とは歳は五、六歳程違っているが、彼の家に遊びに寄っても口を開かず、母親の横に寄り添ったまま、クルリクルリと目玉を転がし、家の中の貧しい品々を物色していた。

それを決しておとなしいのではなく、早熟な眼差しと彼が見破ったのは間違いではなかった。彼が家を出てから四、五年経つ頃、上の滝枝は二十歳になり、整形手術で目と鼻を変えたと、御徒町のクラブ「白夜」に勤めた。

幽霊のような姉妹の一人は、顔形を変えてから急にお喋りになり、「白夜」のナンバーワンになったと聞いた。

間もなくボーイの一人と同棲したが、小金を貯め込む中年の客に一年で鞍替え、若いボーイはさっさと捨てた。不忍池で待ち伏せたボーイに顔を撲られた時も、整形の鼻だけは押さえて、「甲斐性なしっ」と口汚なく罵ったと言う。

こういう話は、妹娘と暮らすへたあざん」が、彼の母親のところへ寄って笑いながら喋った娘の武勇伝によるものだ。

へたあざん」の母親も芸者で、へたあざん」は女給上りで、娘もまたクラブのナンバーワンであるこの親子三代の色譜は、やはりおとなしいだけの少女時代には爪を隠しているものと、

ややあきれ顔で語ってみせた。

そんな娘を御徒町にデビューさせた頃は、まだ女の武勇伝で済んでいたが、間もなくすると、へたあさんゝの足元に火が付いた。

パトロンが、投機に失敗したためか、滝枝の方から難くせつけて、その中年から慰謝料とやらを絞り取ると、その金をへたあさんゝに見せ、それで、山の手のアパートに移り住むように説得した。良い話だとへたあさんゝも涙を流して乗りかけたが、何日か経つと、万年町の家の権利書を持って行かれているのに気が付いた。

とある不動産屋の訪問も受けて、モルタルのその家が売りに出ていると聞き、滝枝の画策を知ったわけだが、へたあさんゝは、「白夜」に乗り込み、娘に、権利書を返さないと、皺くちやの顔におしろい塗って、店でお前と同じ名を名乗って見せると脅した。

奇妙な反撃だったが、ナンバーワンの肩書きを傷つけるには名案で、滝枝は、なんだかんだと言い訳しながら、権利書は親に返した。

そんないさかいがあつてから、滝枝とへたあさんゝの間には不信の垣根が出来たが、滝枝はそんな障害はなんなく飛び越え、前よりも多く、母親と妹に会いに来て、賑やかに取り繕った。それを薄気味悪く思ったのか、へたあさんゝは、ある日、滝枝にはなんにも伝えず抜き打ちに、

万年町の家を売ってしまった。万年町という密林の樹上に住んだへたあざんゝ親子は、こうして、板橋の方に引越してしまったのである。

本来は、山の手に引越したかったのだが、同じ下町の、それも高い所に住んでいると言う。

そんな話を聞いたのも今から四、五年前である。そして今は、その家の名残りもない万年町にへたあざんゝが現われ、同じような空き地で日記を探す彼の後ろ姿を見ていたことを奇妙に思う。

『今どき、なんの用であの町をふらついていたのだろうか』

畳の上で頬杖ついて、行き違った老婆の、一人行く姿を想像すると、あの時は聞こえなかった老婆の松葉杖の音が、コツコツと響いて来て、彼を、どこかに案内しようとしているようなのだ。

それでなくて、どうして、あの町で会ったなどと母親に伝えて来たのか合点もゆかない。去り際の嘆きも、彼に伝えよという何事かの音信ではなかったのかと跳び起きると、急に忘れていた一冊の本が聳えたつ魔の山から投げ落されたように、虚空にクルクル舞った。

それは、紙芝居屋が太鼓の音と共に売っていた『少年王者』という本である。

巨象の群れと共に密林に分け入る半裸の少年が表紙に描かれ、誰がそれを最初に読み切るか

と、町の少年達は、紙芝居の箱に群がった。借りて読もうと思いつながら、いくらか引け目を感じていた彼をどこで見つけたのか、へたあざんは、それを買って彼に渡した。

それ以来、彼を少年王者と呼び、留守番をしている時などに現われると、「一人かい、少年王者」とへたあざんは言った。

男娼が町を去った頃には、既に中学生で、もはや少年王者とは呼ばなかったが、目で笑いかけて来る時などは、成長した少年王者をしばしばと見上げる気配もあった。

『すると』と彼は畳の上で正座して、あの町の空き地で四つん這いになりながら、センチメンタルな日記を探していた自分の後ろに、へたあざんは昔の日のように、まるで少年王者を見るように立ちはだかっていたのではなからうかと考えた。

冗談のように、ある想念を思い浮べるのではなく、しかつめらしく、眉に皺寄せ、苦しそうに考えてみる。

彼は、少年王者と呼びかける視線にまるで合わないセンチメンタルな物腰の自分を思い、面目ないような感じになった。

こうして少年王者に成り続けられなかった男は、一晚、へたあざんの視線と闘いながら、次の日を迎えると夕刻を狙い、御徒町の「白夜」を訪ねることにした。